

港区立郷土歴史館

歴史館だより

すごろく
双六から見る時代今井 里咲
(学芸員)

正月の遊びは、時代とともに多様になりました。たが、かつては家族や親しい人びとが集まって楽しむ遊びが定番で、双六もそのひとつでした。現代においてはテレビゲームやボードゲームといった遊びに変化していますが、「人がコマを進めながら物語に没入する」ことができる点は双六と同じです。定番の双六は挿絵入りの「絵双六」と呼ばれるもので、その起源は室町時代に遡り、地獄界、人間界といった仏教の十界を主題にした、仏界を目指す「浄土双六」にある^{※1}といわれています。

江戸時代には、人気の浮世絵師が制作に携わるようになり、絵双六が広く普及しました。なかには遊戯用にとどまらず、双六に描かれた役者や美人の姿を切り取ってプロマイドのように楽しむ遊び方も見られます。明治時代も引き続き浮世絵師が制作に携わった双六が出版されました。例えば、当館所蔵の「小學尋常科高等科修業壽語祿」は、香朝樓国貞(四代歌川国政)が手掛けた作品です。振り出しからあがりまでのコマ数が多く、大人数でも楽しめる内容になっています。この双六の特徴は当時の学校制度と児童の学校生活を反映していることにあります。テーマは現在の小・中学校にあたる尋常科4年間、高等科4年間の学校生活で、コマを進めることで進級し、あがりの「卒業式」を目指します。尋常科は義務教育で、修了すると高等科^{※2}に進むことができました。



図1「小學尋常科高等科修業壽語祿」香朝樓国貞(四代歌川国政)
明治24(1891)年

おおよそ6歳から14歳くらいまでの子どもたちが学んだ^{※3}ようです。双六には、修身や算術など授業風景が具体的に描かれ、子どもたちの日常が視覚的に伝わってきます。興味深いのは、「及第」や「落第」といった、振り出しに戻るコマが頻繁に登場することです。図2のように落第したコマでは「ああ、いやだいやだ」と言っている子どもの姿が見られ、学業成績が進級を左右した当時の教育制度が表れています。しかしながら、「努力すれば進級できる」という物語を体験する構造になっており、印刷物を通じた社会的学習の側面が見て取れます。



図2 落第した子どもたちの様子(図1部分)

また、小道具、教室の内装には洋風のデザインが取り入れられています。文明開化を経て西洋文化が浸透していく過程が視覚的に示され、近代化の様子を庶民レベルでとらえています。

双六は紙の玩具であったため、遊びつくされて長く保存されることはまれでした。現存するこの双六は時代の価値観や憧れを映す貴重な資料であり、近代教育の様子が読み取れます。

この作品は単独で販売された木版の一枚摺と推定されます。同じ明治時代には、機械による活版印刷が広まり大量印刷が容易になると、少年向け・少女向けなど対象を絞った雑誌が刊行されました。雑誌には付録がつき、正月号には双六がつけられることが多くありました。当時の子どもたちは、こうした双六で遊びながら社会の出来事を疑似体験していました。皆さんもこのお正月は双六で遊んでみてはいかがでしょうか。

参考文献

- ※1 江戸東京博物館『絵すごろく展 遊びの中のあこがれ』1998年
- ※2 港区教育委員会『港区教育史 通史編③明治期の教育①』2022年
- ※3 文部省『学制百年史 資料編』1972年



港区立郷土歴史館

歴史館だより

こまのじょう
横山駒之丞の人物像岡谷 成康
(学芸員)

当館では、慶応4(1868)年5月15日に起きた上野戦争の際、明治新政府軍の兵士が着用した「官軍兵士軍服 付 外套・シャツ」(以下「軍服」と、関連資料の「横山家文書」を所蔵しています。これらについては、今まで港区での展示や刊行物で紹介されてきたものの、「軍服」を着ていた鹿野藩池田家(鳥取藩池田家の支藩)の家臣・横山駒之丞(安則)に関しては、限定的な紹介に留まっています。今回は、旧鳥取藩池田侯爵家が明治42(1909)年から昭和8(1933)年までかけて編さんした「鳥取藩史」などにより、駒之丞の人物像を紹介します。なお、彼は明治になって黙男と改名しますが、ここでは駒之丞に統一して筆を進めます。紙幅の関係で省略した「軍服」や「横山家文書」について興味がある方は、参考文献に掲載した港区の刊行物をご覧下さい。

鹿野藩士・横山竜助の次子(生年月日未詳)である駒之丞は、文久2(1862)年に兄が脱走したため嗣子となり、後に父の死で家を継ぎました。意気が盛んで剣術の腕が非常に立つ一方、暴慢な性格を親族に注意されても顧みなかったようです。

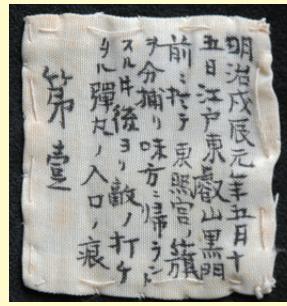
戊辰戦争が始まった慶応4年正月には大砲掛として京都を警衛するも、「某藩士」との諱いで謹慎となり、江戸へ向かう東征軍への従軍を許されませんでした。これを遺憾とした駒之丞は、4月に小銃1挺を携えて密かに京都を脱出、石川左源次と名乗って東征軍に身を投じ、若桜藩士・石川豊太郎(武貞)の小隊へ



官軍兵士軍服

身を寄せます。若桜藩池田家は鹿野藩と同様、鳥取藩の支藩でした。

上野戦争では寛永寺黒門での激戦で負傷するも、長刀を振るって敵へ突進、数人を斬る活躍を見せます。その後、6月に上野戦争での活躍により藩への帰参



軍服に縫い付けられた傷の説明布

を許され、7月8日には兵卒数名を率いて江戸の下谷御徒町に潜伏していた「賊徒」3名を捕縛、刀などを押収して大総督府へ届け出ました。さらには奥州での戦争にも参加し、同年の11月15日に東京へ凱旋しています。7月

17日に「江戸」が「東京」となり、9月8日には「明治」と改元された後のことです。11月18日には数度の戦功により馬廻りへ昇進し、禄高2俵が加増されました。その後は東京で戦傷を治療し、明治2(1869)年8月に帰郷、9月には名を改めました。

明治4年の廃藩置県後は剣の腕を生かし、警保寮(警察官の前身)や海軍省少尉補、静岡県巡査などになります。日清戦争時には志願して近衛師団軍夫百人長として従軍するも、明治28年8月に台湾で渡河中に溺死し、靖国神社に合祀されました。

「鳥取藩史」は、駒之丞の人柄を暴慢な所があつたとする一方、さっぱりして義理堅かったとも記しています。彼の兄には一人娘があり、その脱走時には幼子でした。駒之丞は幼い姪を憐れみ、心を尽くして愛育したといいます。姪が成長すると「自分は次子でありますながら、やむなく家を継いだ。兄の娘に家財を渡すのは当然だ。」と語って家財を与えました。

以上、横山駒之丞の人物像です。今回記した彼のエピソードを通じて、当館の「軍服」や「横山家文書」への関心をより深めていただければ幸いです。

参考文献

- 『鳥取藩史』第1巻 世家・藩士列伝(鳥取県編、鳥取県立鳥取図書館、1969年12月)
- 『港区立郷土資料館所蔵 文書目録』(東京都港区教育委員会編、1996年3月)
- 『港区文化財保護条例施行30周年記念誌 港区指定文化財 昭和54(1979)年度～平成20(2008)年度』(港区立郷土資料館編、港区教育委員会事務局図書・文化財課文化財係、2008年10月)
- 『港区立郷土歴史館特別展 激動する幕末維新の港区』(港区立郷土歴史館編、港区教育委員会、2024年10月)